

地球時代の哲学：池田・トインビー対談の今日的意味

佐藤 優

ただいまご紹介にあずりました、佐藤優と申します。

先生と言われると、ぎくっとするんですね。どうしてかって言うと、こういった紹介のときってというのは、その人にとってあまり都合の良くない話ってしないんですよ。私は、実は、今から13年ほど前に捕まって、檻に入っていたことがあります。512日間ほど、小菅ヒルズっていわれるんだけど、東京拘置所にいました。それは、当時の鈴木宗男事件に連座してしまったからです。皆さん、ああいう所に行かないほうがいいからね、絶対に。(笑い)あそこでは、看守のことを先生っていうんです。それだから、先生と言われると、「おっと、また檻かな」と、こういうことを一瞬思ってしまうんですよ。(爆笑)

今日、私の話を聞いたということ、お父さんお母さんに言ったら、お父さん、お母さん、心配するかもしれない。そんな前科のあるやつだし。正確に言うと、前科というのは、執行猶予期間が終わると刑の言い渡しが効力を失うから、なくなるんだけどね。でも、いずれにせよ、捕まったやつを呼んでくるなんて、最近、創価大学はどうなっているんだと。あるいは、同志社大学の神学部と大学院の神学研究科を出ているっていうと、六師外道のさらに外のキリスト教徒じゃないか。そんな奴に話をさせているのか。なんか最近創価大学はおかしくなってるんじゃないかと。(笑い) こういうふうに関心する向きもあるんじゃないかと思うんです、私がキリスト教神学の専門家だから。

確かに、私は、学会員じゃありません。でもね。四谷3丁目の地下鉄の駅を降りたところを歩いていると、40代半ばくらい、僕よりちょっと若いくらいか、ときには、僕より年上の60歳くらいの人から、「あんたよくわからないけど、最近いい本を書いたらいいね。幸せになるよ。」とか、こういうふうに関心されることもあります(爆笑)。あと、「今すぐ入会するという気持ちがないのなら、会友という制度もあるから、とりあえず、会友で入ったらどうか。」とか言って、道を歩いている時に、よく女性の人に最近誘われますね(爆笑)。ただ、私の創価学会の友だちたちに言わせると、「婦人部の方が気安くそうやって声をかけてくるというのは、かなり信頼されていることだから、これは珍しいですよ。」とのことでした。(笑い)

わたしはね。生まれたのは東京だけれども、育ったのは埼玉県のさいたま市、昔は大宮市だっ

た。あそこには武蔵国一宮の氷川神社という神社がある。神社もいろいろあってね。天照信仰ではない。あれはスサノオ・オオクニヌシ信仰なんです。東京の千代田区の皇居を中心にして、30キロくらい離れたところの円環状に、氷川神社の系統ってたくさんあるんです。明治学院大学の原武史先生が、『〈出雲〉という思想』という本の中で、その分析をしているんだけども。そもそも天照と仲の悪い神様たちってというのが、埼玉県には沢山いるんだな。

この氷川神社っていうのは大宮市民とすごく結びついているから、よく遠足で連れて行かれるわけですよ。私の母親はね、沖縄出身で、沖縄戦を経験して、それで、戦後は、プロテスタントのキリスト教徒になりました。それだから、「学校の行事で神社に行くのは仕方ないけれども、手を合わせるな。それから、お前の小遣いは神社の賽銭のために渡しているのではないから、お賽銭をやったらだめだ。」とか、そういうことはうるさかったんですよ。そうして、神社に行くでしょ。鳥居の下は通るのだけれども、私は、神社では、ペコンと頭を下げるのだけれども、二礼二拍一礼はしないわけね。そうすると、私の同級生で、小学校で、鳥居の下も絶対に通らないのが3人くらいいるのです（爆笑）。

それから、夏祭りがあるでしょ。「お菓子をもらってくるのは構わないの。カレーを食べたりするのは構わないのだけど、あの神輿を担いだらだめだ」と。「あそこには神様がいないから」と、私は母親に言われました。そして3人くらいは神輿を担がないやつがいるんだな。（笑い）

ところがその子どもたちの家はキリスト教徒じゃなくて、そこに行くと、立派な仏壇があるわけです。要するに、創価学会員の子どもたちなのですね。キリスト教徒でも創価学会員でも子どもの頃から家庭で教えられているしつけや教育と、世の中での教育と、ちょっと違うところがある。こういうところで、もしかしたら、私みたくキリスト教の世界の人間でも皆さんと相通じるところもあるのかもしれない。

あるいは、トインビーさんが何で池田先生に惹かれてきたのか。現在創価大学で行われている展示をぜひ見て欲しいんだけども、トインビーさんが池田先生に会いたいって言って、アプローチしてきたというんです。なぜトインビーさんがそうしたか、私には何となくわかる。

私は1979年4月に、同志社大学の神学部に入りました。そしたら、そこに、幸日出男教授がいました。他の教授は皆、同志社大学神学部出身の先生なのだけれども、その人は、クリスチャンなんだけども京都大学の出身でした。それで、宗教学を教えていた。戦時下の抵抗運動の授業をやっていました。そこで取り扱っているのは、創価教育学会の抵抗運動についてで、牧口常三郎初代会長、戸田城聖第2代会長の抵抗運動を取り扱っていました。

日本のキリスト教徒はだらしなかったと。戦時体制に迎合しちゃって、大東亜キリスト教徒に与える書簡なんてものを作っていた。それに対して、なぜ、他の宗教では戦うことができる宗教があったのかと。ただ戦い方もいろいろあるんだと。例えば、大本は、2度にわたる激しい弾圧を受けたんだけども、国家権力に近寄りすぎちゃったからこういうことになったというのが、幸先生の分析でした。あるいは、天理教自体は弾圧を受けなかったんだけども、天理教からわか

れた天理ほんみちが激しい弾圧を受けた。これは天理教に対する牽制だった。ほんみちは何も反国家的なことはやっていないのだけれども、それに対して、創価教育学会に対する弾圧というのは、宗教団体として譲れない筋がある。神札などというものは拝まない。こういったようなところをきちんと守る。中間団体としての筋を守るところから出てきたもので、我々キリスト教は一番学ばないといけない。こういうことを教えられました。

それで最近になって、やはり、創価学会のことを勉強し出すと面白いし、気になるわけです。

それだから、戦時下で、牧口常三郎先生が、どういう抵抗を獄中でしていたのかなっていうのを、牧口常三郎全集の10巻にあります。獄中での特高、当時の秘密警察に捕まった時の調書が収録されています。その調書が質問に対する答えという、問答式になっています。私は捕まったからね、問答式調書の意味がよくわかります。(笑い)

例えば、私がかか罪を認めたとするでしょ。そうすると、「私、佐藤優は何月何日電車の中でつい出来心で隣にきれいなひとがいるので、・・・」とか書いて書いているというのは、これらは警察官や検察官が書くのだけれども、検察や警察も供述調書の内容に同意しているということの意味しています。

それに対して、問いと答えになっているというのは、捜査当局は同意していませんよ。とんでもない考えだ、あるいは、嘘をついていますね。こういうときには問答形式で書くのです。そうすると、問答でこういうふうになっているわけね。「神社には何がいますか。」「神社は空虚です。そこところに神々はいない。」「それでは神社には誰もいないのですか。」「そんなことはありません。そこには鬼神がいるのです。」だから拝まないわけだね。「では、伊勢神宮はどうなっている。」「天照大神は、伊勢神宮にはいません。そこには鬼神がいる。だから、そんなものは拝まないし、そんなところからくる神札も取らない。」こういった事をきちんとやりとりしています。

今になってみると、「あっ、原理原則を守っているな」ってことになるのだけれども、当時においては、命がけの話なんです。命をかけて自分たちの筋を通すことができたという。このやっぱり、強さ。

それからあと、池田先生の著作を読むと、アジアとの関係を重視するでしょ。日本が何でアジアの中で尊敬されないか。日本がもっと強くなっていくためには植民地支配の歴史を忘れたらいけない。アジアの中の日本であるということを忘れてはいけない。ということを、池田先生は強調する。

しかし、よく考えてみてください。創価学会は、あの戦争の加害者だったんだろうか。違うでしょ。被害者でした。普通、被害者だと自分たちはこんなにひどい目にあっただけを強調するけど、創価学会はそうじゃない。創価学会は何も悪いことしてないんだけど、他の日本の同胞がいろんな問題のあることをした。その問題を引き受けなければならないという考え方。こういう考えがほんものの宗教人の特徴なんですよ。

創価大学の魅力っていうのはね、まさに価値を作り出す、そういう人間になることができる場

を提供しているということです。

率直に言って、創大生の中にも、創価大学が第1志望ではなかった人もいます。これは、私は、同志社大学の神学部でお手伝いをしているから、神学部なんていうのは非常に特殊な学部なんだけど、第1志望ではない、同志社ブランドがほしいから来たっていう人もいるし、あるいは、他の大学に落ちこちてしまったんだけど、親がクリスチャンで、行けっていうから、仕方なく来ている、そういう学生もいます。創大生の中でも、志望大学を落ちてしまって、創大だから、お父さんもお母さんも喜んでくれるしと、あるいは、浪人するなといわれたから来ているという人たちもいると思います。でも、こういうことは、すべて縁なのです。

受験に奇跡はありません。その時点における自分の学力がそのまま反映されるのだけれども、それを一生引っ張っていても何の意味もありません。この大学は大学に入ってから一生懸命やれば、それこそ東京大学やハーバード大学や、それ以上の成果が出るようなカリキュラムをきちんと組んでいるし、その皆さんの情熱やる気にこたえること、ちゃんと指導してくれる先生方がいらっしゃる。

創価大学の特徴は何か。

学力に欠損があると、プライドが高い人はその現実を認めることが出来ない。でも、文科系の人だったら数Ⅲ、Cまできちんとやってる人はいないでしょう。しかし、経済学部について金融工学をやるなら、数Ⅲ、Cでは足りないです。高校数学の知識では、偏微分方程式を解けません。そういうことはみんなもう1回数学を勉強しなければならぬわけで、その時に高校生の数学でわからないことがあったら、1回そこまで戻らないとなりません。状況によっては中学生の数学で分からないところがあったら、1回そこまで戻らないと。創価大学では知識の欠損があるところまでもどって、教えてくれるカリキュラムを組んでいるわけです。それだから、国家公務員総合職、国家公務員一般職、地方公務員上級職などの、いろんな試験の合格者が多いのです。あるいは司法試験の合格者も多いでしょ。そこのところっていうのは、いかにこの大学の教育システムが整っているかっていうことの証左です。

それから、学校の成績がいい、ということだけが人間としての価値の全てではない。今のいろんな試験制度の試験での評価基準は、頭の良さとか人間力ということとは、余り関係ない。教科書の内容を覚えて、理解できていなくても覚えて1時間半から2時間で筆記試験で再現することができる能力があれば、司法試験も国家公務員試験も合格します。それとは別の根源的な人間力や価値観を身につけることができる大学って、今日本はそんなにないですよ。創大は、そのうちの数少ない大学なんですね。

そこで皆さん、『創立者の語らい』は持っているし読んでいますよね。潮出版社から出ている『潮』に、今、私は『創立者の語らい』についての連載をしています。それで、この、池田先生の「創造的人間たれ」。これがまず、皆さんにとって、必読論文です。ここで展開されている言

説は、池田トインビー対談の考え方とも一緒です。それだから、池田トインビー対談を勉強するということが、「創造的人間たれ」「スコラ哲学と現代文明」「創造的生命の開花を」といった池田先生の講演を勉強するということが、緊密に関係しています。

すでに雑誌に書いたことなので、この場では繰り返しては述べませんが、例えばなぜ、スコラ哲学を池田先生は取り上げたのか。スコラ哲学なんて言ったって、煩瑣哲学とも言われている難しい話で、それにキリスト教神学とか中世の哲学の話で、何でそんなこと勉強しなきゃいけないのでしょうか？これについて、私はこう解釈しています。

これは、1973年の7月13日、創価大学の中央体育館で行われた講演です。1970年代なんだけれども池田先生は、21世紀のことを考えているんですね。創価大学の特徴がいくつかあります。ひとつは、日蓮仏法の基本的価値観に基づいている。東洋の思想が皆さんの教育の中にきちんと入っているわけです。毎日皆さんきちんと勤行しているし、それから、お父さんお母さんたちの信心の姿を見ている。この過程を通じて、皆さんの体の中に東洋的なものの考え方が入っているわけです。それに合わせて西洋的なものの考え方をいれないとなりません。例えば、ヨーロッパ、ドイツなんかで総合大学 University っていうためには、イギリスでもそうですけれども、神学部がなければならぬ。現在、フランスは少し事情が違います。政教分離が行き過ぎているからです。それだから、フランスはSGIに対する偏見も強いんです。でも、ストラスブール国立大学には神学があります。神学は、見える世界と違う、人間が見えない世界、そこの部分を扱う学問です。それを扱っていないと総合大学と名乗ることはできないわけです。日本の大学は、例えば東京大学の建物は、どこの大学に似ていると思いますか？イギリスのある大学なんだけれども、オックスフォード大学でもケンブリッジ大学でもない。パーミンガム大学に似ています。それは、理科系が強い大学だったから。東京大学は世界で1番初めに工学部ができた大学なんです。それまでは、工学はいわゆる総合大学で教える学問ではなかった。工学部ができて、神学部がないっていうのが、明治期の日本の大学の特徴だったわけです。実学偏重なわけです。創価大学においては、創造的人間を養成するという基礎には、人間学がある。この人間学が、東洋的な人間学と西洋的な人間学全体を包含しているわけですね。

1970年代だとまだバブルなんかもない。皆さんまだ生まれてない。しかし、高度成長期です。その時点ですでに池田先生は、このままだったら、日本は行き詰まるし、閉塞状況にくる、世界の文明も閉塞状況に来ているということ、分かっていたわけです。いわゆるポストモダンの問題意識を、すでに池田先生は持っていました。スコラ哲学というのは近代以前の学問です。プレモダンなわけです。プレモダンの世界を知ることによって近代的な枠組みの限界を超えていく。ちょっと今、細かく難しい話をしてしまったけれども、そういうすごく重要なメッセージが、この池田先生の「スコラ哲学と現代文明」という論考の中には入っているわけなんです。

また、中世に関しては独自の文化をつくったということと同時に、文明史的にこれを見ると「スコラ哲学の果たしたもう一つの意味は、地中海文明の時代からヨーロッパ文明の時代への移行に、決定的なエポックを画したということです。」というようなことが書かれています。ヨーロッパ

とは何なのかについて、ちゃんと勉強しないといけないですよ、というメッセージをここで出しているわけなんです。

創価大学のよさ、素晴らしさということは、外部の人たちもかなり早い時期から指摘しました。そのうちの1人で、ハーバード大学の神学部の先生で、ハービー・コックスという人がいます。このハービー・コックス先生は、池田先生と『二十一世紀の平和と宗教を語る』という本を出しています。これは2008年に出ている本です。私が1979年に同志社大学の神学部に入った時に、組織神学という科目で指定された教科書が、ハービー・コックスさんの『民衆宗教の時代』でした。その当時、コックスさんは、池田先生との個人的な面識はなかったと思います。

コックスさんは、『世俗都市』という本を書いてすごく有名になりました。今の世の中というのは、だんだんだんだん世俗化に向かっている。都市化に向かっている。その中ではお互いの名前を知らない。匿名の世界の中で、人間がバラバラにされるのだけれども、村のしがらみみたいなところにとらわれなくて、新しい人間関係を作ることができる。その積極的な面を見ていこうということを、『世俗都市』という本の中で書いている。アメリカで大ベストセラーになった。今でもアメリカでは読まれています。生きている本です。日本では昔、翻訳が出て、今は、古本屋で買おうとすると1万円以上しています。

コックスさんの書いた『民衆宗教の時代』にはこんなことが書いてあります。世俗化というのはだんだん限界がきている。むしろもう1回、新しい時代の宗教がくる。そのときの宗教は民衆に根ざしている宗教になる。1978年にプロテスタント系の新教出版社からこの本は出ています。創価学会、この宗教団体の中には、新しいエネルギーがあるんだということを書いている。

後に、池田先生とコックスさんは出会って、お互いに意気投合して、対話本を出しています。コックスさんが創価大学のことについて、こういうふうに書いている。『二十一世紀の平和と宗教を語る』17ページから引用します。

コックス「ええ。今回、池田会長と対話の機会をもてることに、私は心から感謝しています。会長は世界の識者との対話を、数え切れないほど重ねてこられました。また、こうした対話を出版物にまとめ、積極的に世に問うてこられました。そのおかげで、私たちは、それらの書籍を読むことができるのです。さらに、池田会長は、このような形の交流を創価大学にも奨励しておられます。ちょうどハーバード大学と同じように、創価大学では、対話や交流が活発に推進され、中心的な位置を占めております。私は、こうした対話の促進こそが、大学の掲げるべき大きな目標であると思っています。ささやかな貢献かもしれませんが、私も、この対話に参加できることをうれしく思っています。」

池田「温かなお言葉に感謝いたします。今から30数年前、歴史学者のトインビー博士と対談した際、博士は言われました。『人類の道を開くのは対話しかありません。あなたは、まだ若い。これからも世界の知性との対話を進めてください』私は、トインビー博士との約束

を胸に、世界の識者との対話を進めてきました。コックス博士は、世界的に有名な神学者です。私は仏法者です。宗教的、文化的背景も、生まれ育った国も、環境も異なります。しかし、私たちが目指すものは、共に人間の幸福であり、共に世界の平和です。私たちの語らいが、人類の前途にとって少しでも有益なものとなることを心から念願しています。」
こういうやりとりをしている。ここに、創価大学の特徴・考え方が現れています。

まず、何よりも重要なことは対話です。とは言っても対話は難しいです。下手をすると、対話ではなくて、モノログ、つまり1人語りや二つ並んでいるということになってしまう。対話は相手の言うことに耳を傾けるとともに、自分が間違っていることについては改める勇気を持たないと、できない。池田先生はその勇気を持っています。

実はね、その昔、創共協定というものがあつた。創というのは創価学会です、共というのは共産党のことです。創共協定という文書があつて、共産党と創価学会は、当時、ありとあらゆるところでぶつかっていましたからね。そもそも価値観も違う。しかし、民衆の中に根を下ろしているところというところには重なる部分があつた。それなら、お互いにきちんとした対話をして、対立を止めるべきで、対話をして行こう。そういったことで合意をしたわけです。しかし、これを、共産党側が崩してしまつた。この創共協定ができて、どうして崩れていくかというプロセスを勉強すると、池田先生の対話、創価学会に染み込んでいる対話の精神がよくわかる。共産党がいうところの対話は、「お前たちが迷信を信じているのは、とりあえず許してやる。政治的に一緒にやれることがあつたらやろう」ということにすぎません。絶対に自分たちの考え方は変えない。「お前達は俺達の考えに従う自由がある。」という感じなんです。創価学会は、共産党が言うことで正しいことがあるのなら、そこをきちんと考えて、我々に間違えていることがあるのであれば、それはそれで改めて、少しでも人間という観点から、よりよい社会をつくって、幸福を追求して、平和を実現していきましょう、という考え方です。創価学会は、こういう姿勢で一貫していました。それだから、怖くて共産党が対話から逃げてしまつたんですね。今ではそういうイメージはないけれども、30、40年前、共産党というのは頭のいい人たちが入るところと思われていた。組織もしっかりして強いグループなんだっていう感じで世の中のイメージがあつたんだけれども。なんだ、この程度の組織なのかと、創価学会の先輩たちは、皮膚感覚でわかつたわけです。そこるところから、現実的な政治について、平和をどうやって現実的に維持していくことが、創価学会の人たち、公明党の人たちは、自分の頭で考えていくようになった。創価大学の教育と日本の大きな政治は、大きく関係しているわけです。

さて、『地球時代の哲学』。これは池田トインビー対談なくしてはありえない本です。最初、私は『潮』という雑誌に一番最初に出たのは、猪瀬直樹東京都副知事（当時）との対談です。それからしばらく経って、『潮』編集部が、私が本も出したから、それについてインタビューしたいというアプローチがありました。

そのとき私は、自分の本よりも実は話したいことがあるんですと『潮』編集部に伝えました。それは何かといたら、『地球時代の哲学』の頭のところに書いたのだけれども、1990年7月27日のモスクワにおける池田先生とゴルバチョフソ連大統領の会談についてです。

どうということかという、その3日前に、桜内義雄衆議院議長（当時）を長とする日本の国会代表団が来ました。その翌年の春に、ゴルバチョフさんが日本に来る予定を確定させるためだった。これはすごく大きい意味があって、それまでロシア時代のロシアの皇帝や、ソ連になってから共産党の書記長が、日本に来たことは一度もない。初めての元首の訪問だからすごく重要だったわけです。

桜内さんが来るから、それに引っかけて、日本側が、「桜の季節に日本に来ていただけませんか」と尋ねる。そうしたら、ゴルバチョフさんが「ああ、いいですね」と言って、話をまとめることになっていました。そうしたら、外務省に、こういう声が聞こえてきた。桜内さんがゴルバチョフさんの機嫌を悪くするといけないから、「北方領土の話をしたくないらしい」という話です。外務省としては困ってしまう。「北方領土の話をきちんしてくださいよ。しないとどうなるかわかりませんよ。」と桜内さんに強く言った。そうやって、ネジを巻きすぎてしまったわけです。

それで、会談が始まって、「北方領土問題の解決がぜひとも重要です」って話をしたら、ゴルバチョフが怒ってしまってね。「お前たち、話はそれしかないのか」とか始まってしまったんですよ。「いや、我々は領土問題を解決して」と。「それなら、我々は南方領土ということもできるな。」とかゴルバチョフが言い始めてしまったんです。「他に話はないのか。そういうことならば、行かなくてもいいな」となって、会談終わりってなってしまったわけ。実質的な話は、5分ちよつとかな。公には30分話したって、ごまかしたけどね。（笑い）

そしたら、その3日後に、仏縁で、池田先生とゴルバチョフさんが対談するって話になっていました。それだから外務省が、頭を下げて、このままだったらゴルバチョフが来なくなるから何とかしてくださいと池田先生にお願いしました。でも、池田先生は、こここのところで立派なんだな。「やりましょう、私は宗教人で、教育交流、文化交流なんだけれども、日本の政府がお困りだったらそこはやりましょう。」ということになった。ただし、ここは池田先生らしいんです。日本の外務省の振り付け通りにはやりませんよ、と。それでゴルバチョフさんに、「桜の春か、紅葉の秋に日本に来られませんか」と言いました。紅葉の秋を付け加えた。ただこここのところはすごく重要な意味がある。元首の公式訪問には必ず宮中行事が入ります。天皇との会見が入ります。そうすると、それは軽々に動かすことはできないんですよ。外務省は春で決めているわけで、秋にはできない。しかし、それはあくまで、外務省なり、日本政府の都合です。創価学会は民間団体です。社会团体だし中間団体だから、政府の都合に全部つき合わなくてはならないということはないわけです。そこにおいて、自主性を発揮しました。日本外務省の下請けではないのだぞ、ということを示したのです。日本国家と創価学会とが対等であることを示したのです。

この会談の結果、ゴルバチョフさん日本に来ることになりました。それで初めて、択捉島、国後島、色丹島、歯舞諸島という4つの名前を出して、これが係争地なんだよということをも認めた。

それだから、北方領土交渉は動き出しました。池田先生とゴルバチョフさんの会談がなければ、北方領土交渉なんて全然動かなかった。ただ、このことは記録に残っていません。

このことについて、『潮』編集部には詳しく話したんだけど、その前に別のところに書いています。『新潮45』という雑誌に書いています。新潮社って、創価学会にとって、一番の友だちの会社じゃないよね、多分。(笑い)でも、裏返して考えると、『新潮45』に書いてあるということは、池田先生におべっかを使って書いているということにはならない。創価学会のプラスになるようなことを、新潮社の媒体が書くことあり得る？ないでしょ？そしたら、それだけ信用性が増すじゃないですか。だから、私はそこを計算して新潮社の媒体に書いたんです。その時は、何の反応もなかった。

ところが『潮』に書いたとたん、あちこちから電話かかってくるんです。「気をつけたほうがいい」とか言って。「それは、それは、創価学会は恐ろしい団体だ」っていうのです。「有識者にとんでもない額のお金を渡して、取り込んでいく」と。「あんなところの雑誌に出たら、あんた終わるよ、作家として」。私は「へー」って受けとめました。でも銀行口座をみてもそんなに大きなお金振り込まれていないんですよ。(爆笑)雑誌の原稿料っていうのは、編集部の秘密中の秘密ですが、要するに、総合雑誌として標準的な値段なんですよ。

そうして私は、これはまずいと思った。創価学会タブーがあるんです。どういうタブーか。世間では、創価学会は力がある。それだから、創価学会の悪口は書けない。そういう創価学会タブーがあるんだ、みたいなことを言うんだけど、実態は逆なんです。創価学会の悪口なら、どんなことでも書ける。池田先生に対する誹謗や悪口を書く雑誌や新聞なんていうのも、たくさんあるわけです。ところが、創価学会のやっていることを事実にして、これは立派なことをしている、池田先生が文化人として、世界でどれだけ大きな業績をあげているかとか、こういうことは書けないんです。その意味での創価学会タブーがあるんです。

だから私はあえて積極的に創価学会のことを等身大で見たい。善いものをきちんと善いと書きたいと思って、ずっと実行しているわけです。そうすると、面白いんです。いろんな腹を割った話が、創価学会関係者ともできるし、その周辺にいる人たちともできるようになった。創価学会に反対しているような人たちとも議論をしたり、あるいは、既成仏教教団からいろんなアプローチがあったりとか、様々なことがあるわけです。

『地球時代の哲学』の中で強調したことですが、2年間連載しましたが、最初の3回くらいは、私は池田トインビー対談の意味がよく分かっていませんでした。東西の偉大な文化人、知識人の対話だと思っていた。ところが途中から違うということに気づきました。

池田先生は、言葉遣いが丁寧です。トインビーさんと意見が違うときは、かみ合わない点について留保しながら、お互いに理解が進むところを選んでる。ただし、池田先生の基本的な考え方が大きく変わるっていうことはない。それは池田先生がかなり若い時期に、日蓮仏法に基づいたところの価値観を確立して、その方向性というのは揺るぎなきところがあるからです。それに

対して、トインビーさんはいろんなところでもの考え方・価値観が、池田先生との対談を通じて、触発されて、変わっています。トインビーさんの偉いところは、国際的な大学者であるにもかかわらず、若い池田先生に教えられ、触発されて、あっ、自分は少し間違えたなというところは、ここは間違えました。考え方を変えますと、率直に言うところです。

実は、この本は、私の解釈では折伏の書なんです。折伏というのは、こういうことなのだと思います。対話を通じた形で日蓮仏法の真理っていうことを理解する人をふやしていくということです。

それで、池田先生は激しいやりとりはしません。基本的な考え方が違うというところになると、そこのところは、私は違う考えですねっていうことをやんわりと指摘するにとどめています。ただし、1ヶ所だけ激しくやりあっているところがあります。この本の中で触れました。

池田「正しい宗教と誤れる宗教についての博士の規定には私も賛成です。ただ一点について、私は異なる意見を持っています。それは、日本の神道に対する評価です。」

はっきりと池田先生はここで意見違いますよ、ということを行っているわけです。

「神道は、たしかに、自然のあらゆる存在に尊厳性を認める思考から生まれた宗教です。しかし、なにゆえに尊厳であるのかということになると、神道にはそれを裏づける哲学的体系に欠けています。その根底にあるものは、祖先が慣れ親しんできた自然への愛着心です。これは祖先を媒体にした自然崇拜といえるでしょう。したがって、神道にはきわめてナショナルスティックな一面があるわけです。そして、この神道イデオロギーの端的なあらわれが、いわゆる神国思想なるものでした。この神国思想は、周知のように、きわめて独善的なものです。」

こうしてみると、神道の場合、自然に対する融和性はその一部にすぎず、その裏面に、他民族に対する閉鎖性や排他性をもっているわけです。こうした性格は、あるいは日本の神道にかぎらず、汎神教を伝統とする他の民族宗教のうちにもみられるかもしれせん。」

ということを指摘しているわけです。

要するに、ここでのポイントは国家神道になります。国家神道を手放しで支持するということではできませんね。「ここのところだけは注意しないとイケないよ、トインビーさん。そこのところは分かってください」と池田先生は言っているわけです。トインビーさんも、池田先生の指摘の意味を完全に理解しています。

それでは、タイムマシンに乗って、戦前に行きましょう。国家神道ってというのは、日本政府の説明では、宗教ではなかったんですよ。宗教ではなくて、大日本帝国の臣民の慣習である。それだから神札を受け取れという話になった。「これは慣習だろう。それに従わないのは、日本人の慣習に従わない非国民だ」ということになったわけです。日本における国家神道の国教化については、宗教ではないという形で行われました。

そうすると、靖国神社をめぐる問題でも、宗教的に中立な追悼施設を作ったらいんじゃないかという意見もあります。私はこの意見には非常に批判的です。どうしてかということ、死者の霊

を慰めるという発想自体が合理性で割り切れない宗教的な要素を含んでいるからです。何かその施設に対して拝むということ、それが慣習なんだってということになると、事実上の国教になる危険性がある。だから、信教の自由を保障することはすごく難しい問題で、特に日本の場合は空気に流されて、これが慣習なんだっていう形になった場合、そういう形で信仰の自由・良心の自由が侵される危険性があるわけです。

もちろん、必要以上に周囲と軋轢を増やす必要性はありません。キリスト教徒だって今はお神輿を担ぎますよ。それは社会の慣習だという理解で。神社にいった二礼二拍一礼するキリスト教徒も今は多いと思います。しかし、そここのところで、国家の強制によって、神社参拝をさせられるとなると、それはちょっと違うなあと、きちんと距離をおけるかどうかという基本的な価値観を持っているかどうか重要です。池田先生は、いろんなところで妥協することができます。ただ、それはきちんとした原理原則をもっているからなんです。

さて、皆さんはすごく幸せな時代に生きています。今、創価学会という形で、仏教が世界宗教になろうとしている。「ちょっと待って。我々は、確かに創価学会関係者だからそういうことを聞くと何となくうれしくなるけれども、佐藤さん、それ、ちょっと、おべんちゃら過ぎるんじゃない。だって、世界史の教科書には仏教は世界宗教って書いてあるよ」という意見を持つ人もいます。でも、教科書に書いてあることを額面どおりに受け止めたらダメです。キリスト教はヨーロッパやロシアから南北アメリカ全体に地図にまたがると書いてあります。イスラムはアフリカ中東から東南アジアを経て、フィリピンの南部までイスラムのベルトがあります。中央アジアだってそう。仏教は、東アジアと東南アジアに限定されています。地域限定の世界宗教って感じです。あきらかに世界三大宗教と言うけれども通用している範囲は狭いです。「でも、そんな事言ったって佐藤さん、ロサンジェルスに浄土真宗の寺があるよ。禅宗のお坊さんがパリにいるよ。」という質問が寄せられるかもしれません。しかし、それはディアスポラ、すなわち海外の日本人共同体のためのお寺なんです。それから、あるいは、「クールジャパン」、つまり格好いい日本みたいなどころでの文化としての禅とか。これは、人間の基本的な価値観と関係するところの宗教とはちょっと違う。

実は、仏教が本格的な世界宗教になるっていうのは、私の見ているところでは、そこは創価学会の皆さんの力によって、特にSGIを創設されたことによって、それが可能になったわけです。

私は2014年に、『創価学会と平和主義』という本を出しました。その関係もあって、皆さんの歴史について一生懸命、勉強しました。この勉強を通じて、ブッダからスタートしてはいけないということに気づきました。日蓮大聖人からスタートしなければいけない。なぜなら、我々は、現在、末法の世に生きているから。これはキリスト教においても、そうです。旧約聖書のモーセからではなく、新約聖書のイエス・キリストからスタートします。キリスト教は終末論的緊張と言うんですけどね。そういう状況の中で、生きた宗教として活動するためには、日蓮大聖人をスタートにしなければならぬ。これは非常に重要な点です。

世界宗教には共通した特徴があります。

キリスト教の創設者は誰ですかって聞かれて、イエス・キリストって書いたら、高校入試、大学入試では○です。しかし、神学部の試験や神学研究科の大学院の試験でそれを書いたら、単位をもらえない。どうしてでしょうか。イエス・キリストは、自分のことをユダヤ教徒と考えていたからです。ユダヤ教とは違うキリスト教という新しい宗教を作ったのは、パウロです。

パウロという人は、イエス・キリストと一度も会ったことがありません。むしろ、当初は、キリスト教を弾圧する側にいました。ところが、ダマスカスに向かう時に、光に打たれて倒れてしまう。何事かと思ったら、「サウロ(パウロの旧名)よ、サウロよ。お前は一体何しているんだ」と。「あなたは誰ですか。」「あんたが迫害しているイエスだ」と。こういう話があって、パウロの新しい人生が始まる。

このパウロという人がね、2つの重要なことをします。

1番目。ユダヤ教の宗門でパリサイというグループがあります。これは聖書で、マムシの輩という形で出てくるんだけど、イエスはパリサイという宗門に属していました。このパリサイというのは、律法の専門家で、仏教における僧侶のようなものです。律法学者が、いちばん偉く、一般の信者は、律法学者の下。こういう考え方で、普通の信者達を地の民とかいってバカにしている。救われるのは、律法についていろんな知識があって、詳しくて、律法の規定を守っている俺たちだけなんだ、とものすごく威張っているわけです。皆さんは直接経験していないけれども、皆さんのお父さんお母さんは、そういう宗門との軋轢をどこかで経験していると思います。(笑い) こういう宗門と決別する事が、キリスト教が世界宗教になるために絶対に必要だったので。

それから、2番目。それまで、イエスを信じる人たちがユダヤ人の世界にしか、宣教、皆さんの言葉で言うと広宣流布をしていなかったわけです。それが、当時の世界、中東からヨーロッパ、「オイクメネ(人が住むところ)」っていうんですけども、人間が住んでいるすべての世界に宣教していく。つまり、パウロは世界広宣流布を始めました。

日蓮正宗という宗門と決別する過程では、第1次宗門事件、第2次宗門事件がありました。第1次宗門事件が起きた後、SGIが本格的に世界に出て行くという流れになっていくわけです。

池田先生の戦いはとても興味深いです。必ず、2段階の戦いがあります。

「ケンカの流儀」という『中央公論』の連載の中で、私は、大阪事件の時の池田先生の戦いについて扱っています。皆さんも大阪事件についてはしっかり勉強していると思います。池田先生が1回逮捕されたことがあります。選挙違反をしたという濡れ衣を着せられました。そんなことしていません。それだけど、池田先生は警察に捕まったときに、調書を作成しました。その調書は、個別訪問を指示しましたよとも読めるような、有罪が取られる可能性のある内容になっていました。池田先生の意志力、精神力、人間力をもってすれば、不当な取調べについては、一切を拒否して完全黙秘する、あるいは、否認調書を作成することも出来ました。しかし、なんで、そんな調書を書いたのか。もし池田先生が否認する、あるいは、黙秘するんだったら、戸田先生を

捕まえてくることを当時の警察が考えていたからです。牧口先生が獄中死された。当時、戸田先生は、糖尿病が大分悪くなっていた。獄中生活に耐えられないことは明白でした。初代会長と2代会長を檻の中で殺すことになって、国家権力に歯向かっている教団は、こうなるんだ、これを見せつけようとしている。そこを池田先生は読んだわけです。それだからどんなことがあったって戸田先生を獄中で殺させるようなことがあってはならない。池田先生は、リスクを一身に背負った。

しかし、外に出てきてからは、反転攻勢で、中之島公会堂での大きな集会をはじめとして、権力悪を徹底追及した。裁判になって、裁判官に、お忙しいでしょうから、池田さんもう来なくてもいいですよ、と言われました。「いやいやと、大事な、大事な関西の同志がいますから、私は来ます。」と池田先生は答えました。要するに、私は、広宣流布の仕事をしに来ているんだと。そのついでに巻き込まれた裁判に来ているだけなんだと言って、裁判の構造を変容させてしまいました。こんなイカサマ裁判が、いかほどのものかと。

それによって、無罪を勝ち取ります。その時、池田先生はなんと言ったか。「私にしかできない戦いだった」と。確かにその通りだと思います。1回引いて2回目に勝利を収める。最初に必ず勝つという信念が池田先生の中にはあります。それは綿密な計算というよりも、ある意味自然にでてくるのです。これは池田先生が、天賦の才をもった宗教人だから可能になるのです。

宗門事件だってそうでしょ。第1次宗門事件のときには、おわび登山という形で、大石寺に行くこともあった。一緒に今まで進んできたのだから教学においても共通してる部分がある。いま、宗門と決別してもなかなか一般の会員の中にはついていけない人もでてくる。そういう状況においては、一步退く。そして、衛星放送などを通じて、創価学会の基本的な考え方を多くの会員と共有していきました。

それから皆さんも、去年からマークシート方式になったと思います。創価学会は、教学試験に力を入れているでしょう。(笑い)これは宗教改革者のルターと一緒にです。万人祭司説です。全員が教学を知って、全員が僧侶と同じレベルになったら、お坊さんはいらなくなります。こういった点では、我々プロテスタントからすると、皆さんが教学試験をやっていることは、よくわかります。プロテスタントに似ていると思うわけです。いずれにせよ、教学的に基礎体力をつけとくことによって、第2次宗門事件で最終的に決別することができました。二段階で勝利しています。

この勝利が最終的に確定されたのが、2014年の会則の改正です。会則の改正について、この年の聖教新聞11月8日付。掲載されている原田会長の説明がとても重要です。「創価学会の会則の改正について申し上げます。私どもは、池田先生の指導のもと、昨年11月、広宣流布大誓堂の建立によって、世界広布新時代を開幕し、日本も世界も、新たな歓喜の前進を開始いたしました。広宣流布大誓堂にはすでに世界192ヶ国・地域の同志を迎えています。日本各地から、世界から、大誓堂へ、大誓堂へ、という滔々たる信心の流れは、着実に勢いを増し、名実ともに、創価学会の「世界広布新時代」、すなわち、世界宗教としてのさらなる躍動が開始されたのであります。

この世界広布の大いなる流れを決定づけたのは、ひとえに、池田先生の大闘争と未来を展望する構想にあったことはいうまでもありません。」その構想が既に池田トインビー対談の中にでてい

るのです。ですから、現在の創価学会を知るためには、SGIを知るためには、池田トインビー対談を精読しなければなりません。

そして、こう続くわけですね。「とりわけ、平成3年(1991年)、日蓮正宗宗門が創価学会を破門し、広宣流布を阻む魔の本性を現した際に、先生がその時を捉えて「魂の独立」を宣言されたことが、重要な分岐点でした。」ただし、それに合わせた形で、教義の全体的な改正はできていなかったから、その第一歩が始まったということなんです。

ところが宗教改革の歴史を見てわかる通り、1957年にルターが95カ条のテーゼを発表する。それで、宗教改革が始まるんだけれども、カトリックと一緒にずっと長いことやっていたから、神学の中にはカトリック的なものたくさん入っているわけです。ルターの弟子にメランヒトンという神学者がいます。この人は、カトリックのスコラ神学のようなプロテスタント・スコラ学なんてものを作ってしまふ。結局、プロテスタントらしい教義が出てくるまでには200年かかっています。教義の問題を解決するためには、すごく時間がかかります。

だから、おそらく、皆さんの世代が、どのような形で世界宗教に合致させたドクトリンをつくっていくかということになります。皆さん、そして、皆さんの次の世代の人々が、100年ぐらいかけて日蓮世界宗のドクトリンを形成していくのではないかなと、私はみえています。教義はすごく重要な問題です。これに成功することはもう決まっています。創価学会は常に勝つのです。それによって、世界宗教になっていくのです。

ところで、今SGIの韓国のメンバーはどれくらいいるのでしょうか？韓国に今、150万人いるでしょ？これがどれだけ日韓の平和を維持するのに役に立っているか。韓国と日本の関係が緊張している中で、多分、SGIの韓国のメンバーは独島のことを韓国の領土と思っていると思います。皆さんは、竹島は、日本の領土だと考えていると思います。しかしそれによって、掴み合いの喧嘩をするでしょうか？しませんよね。そんなことで、池田先生を悲しませたいと思うようなSGIメンバーや創価学会メンバーがいるのでしょうか。いるはずがありません。また、台湾のSGIメンバーは、一時、非合法団体にされているから、結末も非常に強い。しかし、釣魚台、つまり尖閣諸島に関しては台湾の領土と考えていると思います。日本の創価学会員は、日本国民として、尖閣諸島は日本の領土だと思っています。しかし、台湾のSGIメンバーと掴み合いの喧嘩をするでしょうか？それがゆえに殺し合いのようなことが起きるでしょうか？池田大作先生という名前の中に平和が担保されているわけです。

こういう大きな流れが、今後、東アジアの平和を担保していくことになるわけです。

実を言うと、私もときどき、創価学会に不満を感じる場合があります。

それは何かというと、自分たちの力を過小評価している時があるからです。普通、宗教団体

に所属している人たちは自分たちの宗教団体の力を過大評価する傾向があります。(笑い)しかし、そうではない。創価学会は過小評価していることが多い。

それから、あともう一つ。創価学会と公明党との関係とか何とかに関して、何か、かつての言論問題があるから、変な風に見られているんじゃないかなって過剰に気にしすぎています。それだから、公明党の資料を見ても、創価学会のことが一言も出てない。創価学会の資料を見ても、公明党のこと一言も出てない。これはちょっと、不思議な感じがします。

ただし、この不正常的な状況が2014年の11月に改まりました。「大衆とともに公明党50年の歴史」という公明党50年史冒頭の写真のページを見てください。1枚目が木の年輪です。その次のページに、池田先生が演説している姿の写真が映っている。そして、山口那津男代表は序文の中で、「公明党は池田大作創価学会会長（当時）の提唱によって作られた政党です。」ということをしちんと言っている。これはすごく重要です。言論問題についても、この公明党50年史は踏み込んで説明しています。

だから、ここでは繰り返さないけども、あの言論問題について、創価学会は決して間違っていないませんでした。だって考えてみてください。取材をしちんとしないで、選挙の直前に、創価学会の悪口を書いている本が出るってことになる。創価学会は民間団体ですよ？ちょっと、そういう取材をしちんとしていないのは、なんとかしてもらえませんかとか働きかけることに何か問題ありますか？ 私は問題があるとは全く思いません。ところが、創価学会に力が非常にあって、その影響がますます強くなるということに対するやきもちと恐れの混ざった感情から、とんでもない言論出版妨害が起きているという嵐が起きてしまった。その現実の中で、いくら筋を通そうとしても、必ずしも筋が通るときばかりではありません。大阪事件のときもそうだし、第1次宗門事件のときもそうでした。そのときは、一歩退却する必要があった。そして、2段階で勝利しますってことを考えるのでしたら、言論問題に関してでもどっかのところで、もう一回しちんとした形での検討をして、結論を出さないといけないんじゃないかと思います。その発端は今の公明党50年史の中にあると思います。

ところで、『中央公論』の1995年4月号で、池田先生はジャーナリストの田原総一郎さんと対談しています。そこで、王仏冥合についてこういう風に述べています。田原さんが、公明党が結党された当時、王仏冥合が世間から政教一致とみなされていたことを指摘すると、池田先生は「政教一致という意味ではない。王とは政治の次元、仏とは仏法の次元です。つまり、仏法の説く慈悲の心をもって政治をしようという意味なんです」と答えました。さらに、田原氏が王仏冥合自体は正しいわけですねと問うと、「正しいです。慈悲、生命尊重、福祉の理念を政治に反映させようということですから。」と断言しています。

田原総一郎さんが私にこの対話のコピーをくれて教えてくれたんです。「ここをしちんと、佐藤さん、勉強しないと、創価学会と公明党の関係のことはよくわからないよ」と。だから、王仏冥合は正しいんですと池田先生が明言していることをどのような形で現代的に表現するかということが、教学の専門家とか、政治学者とか、そういった人達の課題ではないかと思います。

創価学会のどこが強いのか。これは、存在論的な平和主義なんです。自分の生き方、日々の生き方の中に平和というのがしみ込んでいます。それだから、ある意味では、皆さん、創価大学で勉強してしまったら、戦争ができない身体になります。(笑い)どんなに勇ましいことをしようと思っても戦争はできないし、非暴力で物事を解決するところの強さを理論的にも生活の中でも表現していくようになるわけです。

創価学会から離れてしまった公明党の昔の幹部なんかの考え方なんかを見ると、ああ、政教分離の問題に行き過ぎがあったからこういうことになったんだなと思うことがあります。

政治には政治に内在する魔があります。カール・シュミットに言わせると、政治というのは友と敵をわける、敵をやっつけるのが仕事です。宗教はそうではありません。そうすると政教分離が行き過ぎると、「これは、名誉会長や創価学会の皆さんをわずらわせる話ではないです。」「創価学会の皆さんは知らないでいいです。」「これは政治のことだから、こちらで解決します。」というふうなことを繰り返していくと、だんだんだんだん自分が権力を持って行って、何でもできると思い上がるようになる可能性があります。政界事件簿とか、裏何とかみたいな本を、かつての公明党の幹部で書いたりする人がいるんだけど、そういう現象の背後には、行き過ぎた政教分離によるネガティブな要素、構造的な要因もあったと思います。そういうことがあったときは、池田先生がいつも軌道修正をしてきました。それだから、政治と宗教の間の一番難しい微妙な関係についても、池田先生は上手な調整をしてきました。

私は、創価大学からは型破りな人がたくさん出てくると思います。それはどういうことかというのと、創価大学にいるときに学問の型をきちっと覚えるから。神学や教学でもそうです。基本は忠実にものごく伝統的に手堅く勉強しないといけないと思います。その型をきちんと押さえたところで、そこから型を変形していくわけです。

キリスト教にとって一番重要なことはイエス・キリストという名です。この名が救いなんです。私は、創価学会にとって一番重要なことは、池田大作先生という名前だと思います。そして、池田先生の中に体现されているところの日蓮仏法、それは世界宗教と現在なりつつある仏法ということなんですけれども、それを皆さんが、体感するってことなんだと思います。だから、池田トインビー対談を読むことによって、皆さん自身は池田先生の思想を体験し、追体験していく、これが非常に重要なことじゃないかと思います。

師弟関係という基本がしっかりしている人は、私を含む六師外道の外側のキリスト教徒からも、尊敬されます。自分のきちんとした立場をもっている人は、それ以外のきちんとした立場を持っている人たちからも尊敬されます。そして、相互理解が進みます。そのための良き教育をこの大学はしていると思います。ぜひ皆さん、一生懸命になって勉強をして、友達を大切に、いろんな課外活動で青春を燃焼してください。